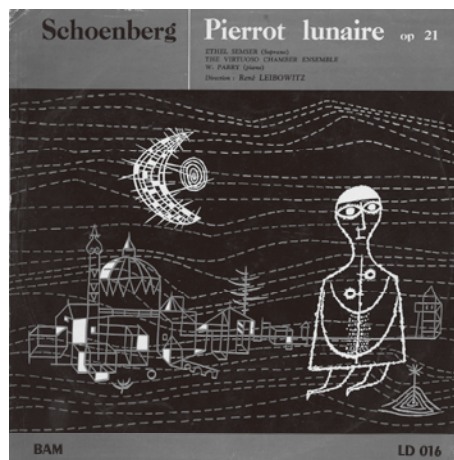


2枚の「ピエロ」。

作曲者自身によるものと、弟子でもあったレイボヴィッツによるもの。



月に憑かれたピエロ

12音技法の創始者にして現代音楽の祖、とも言うべきアルノルト・シェーンベルクは、その創作の中期——いわゆる無調時代に、作曲家ダリウス・ミヨーの言を借りれば「デカダン様式で、相当に悪趣味な」ベルギーの詩人アルベール・ジローの詩に基づく21の小曲からなる組曲「月に憑かれたピエロ(Pierrot Lunaire)」を作曲しています。ドイツ表現主義を具現した傑作で、無調から12音技法への転換点として20世紀音楽の流れを決定づけた作品とも言われています。

この曲は、シェーンベルク自らが考案した、シュプレヒシュティンメ(Sprechstimme)と呼ばれる、歌とも語りともつかない唱法で歌われ、「歌うことなく話し、語ることなく歌う」ことを要求します。その唱法は、ソノリティにおいて、また音楽表現として劇的な効果を発揮し、未完のオペラ「モーゼとアロン」において再び使われることになります。また、「ナポレオン・ボナパルトへの賛歌」や晩年の傑作「ワルシャワの生き残り」といった曲にまで、その影響を辿ることができます。

初演は1912年10月16日ベルリンにおいて行われ、作曲者による指揮、作曲を依頼したウィーンの女優、アルベルティーネ・ツェーメによる語り、弟子でもあったピアニスト、エドゥアルト・シュトイエルマン——今なお色褪せないシェーンベルクのピアノ曲録音を残しています——によって演奏されました。1912年という年は、既に亡くなっていたマーラーの「交響曲第9番」がブルーノ・ワルターによって初演された年でもあり、「ピエロ」のウィーン初演では一悶着起きたそうです。面白いことに、翌1913年には、ストラヴィンスキー

の「春の祭典」がパリで騒動を起こしています。

私とこの曲との出会いはクラシック音楽を聴き初めて間もなくで、聴きなれない不協和音とグロテスクな歌に戸惑いながらもこの曲に強く惹かれました。随分若かった私は、おそらくその題名の奇妙な語感と、ジローによるシュルレアリスティックな詩にまいってしまったのだと思います。熱狂、陶酔、忘我、甘美を誘う調性音楽——いわゆるクラシック音楽との折り合いをどうにかつながらシェーンベルクとその周辺を聴き進んでいったのが、私と現代音楽の邂逅といつてよいでしょう。

その後も私にとって「ピエロ」は、シェーンベルク、現代音楽、あるいはクラシック音楽において常に特別な位置を保ち続け、事あるごとに聴き続けてきました。初めのうちこそグロテスクであり、デカダンであり、ある種居心地の悪い音楽と感じていたこの曲ですが、今聴いてみると、不安な時代を写しとっているのは確かではあるものの、12音技法へ向かう確固たる信念とエネルギーに満ち溢れ、むしろ美しさをすら感じてしまいます。

シェーンベルクは「音楽は美しくある必要はない、真実であるべきだ」と語り調性を捨て去りましたが、その結果として生みだされた音楽は、えも言われぬ美しさを湛えたものばかりなのです。ここに「真実」と「美」のアイロニカルな矛盾を感じるのは私だけでしょうか。それにまた、シェーンベルクという言葉は「美しき山」という意味なのです。

神田神保町 クラシクス 店主 木下 慎